

1	北海道教育大学附属札幌小学校 外7校	25～28
---	--------------------	-------

## 平成28年度研究開発実施報告書（要約）

### I 研究開発課題

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力を育成するため、小学校に新教科を導入し、4技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法及び評価方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究開発

### II 研究の概要

小学校第1学年及び第2学年で「英語活動」、第3学年から第6学年で「小学校英語科」を導入し、国際社会において主体的に活躍できるコミュニケーション能力の基礎と積極的な態度の育成を目指す。具体的には、

- ① 「英語活動」「小学校英語科」の目標と評価の在り方
- ② 4技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムや文法指導の在り方
- ③ 小中の教師間交流、児童生徒間交流、カリキュラム連携の在り方

を研究する。

中学校では、外国語科の授業の一部を小学校英語や、高等学校との接続を目指した指導の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定し、外国語科における指導計画と指導方法の見直しを研究する。

さらに、ICTを活用しての個別学習、遠方の児童生徒たちとの英語を介しての協働学習や交流学习の在り方を研究するとともに、その成果をウェブ上でデータベース化し、その効果的な活用を図るための指導や評価の方法をあわせて開発する。

### III 研究の目的と仮説等

#### 1 研究仮説

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力の基礎は、小学校において「英語活動」「小学校英語科」を導入するとともに、中学校の外国語科の授業の一部に「スパイラルタイム」を設定し、小・中学校の効果的な連携を図る中で、ICTの活用や、仲間との協働学習を効果的に導入しながら、4技能を総合的に育成することで向上する。

国際社会において主体的に活躍するためには外国語を運用する能力が必須であるが、その根幹となるのは、異文化への関心であり、異文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図りたいという意欲である。その意味において、現状の外国語活動は、コミュニケーションへの意欲の向上に大きく寄与している。一方、コミュニケーション能力の育成のためには、言語や非言語のあらゆる手段を目的・場面・状況等に応じて使い分けながら、自分の気持ちや考え、思いなどを伝え合う経験を積ませる必要もある。したがって、児童生徒の発達段階に合った言語活動の場を設定し、英語の語彙・表現を活用しながら「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を養うことも不可欠である。しかし、外国語に初めて触れる小学生にとって、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を短期間のうちに同時に習得させることは大きな負担となる。そこで、小学校第1学年及び第2学年で「英語活動」を導入し、第3学年から第6学年で「小学校英語科」を導入する。低学年で養うコミュニケーション能力の素地の上に、中学年から発達段階に合った系統的な学習を進め、コミュニケーション能力の基礎を養うことができるようにする。また、教科として指導すべき知識や技能の定着を図っていくことになるが、英語を用いて、進んで相手の気持ちや考え、思いなどを理解したり、自分たちのことについて自信をもって表現したりしようとする態度を醸成することも大切である。そのために教育内容・指導方法を改善するとともに、中学校との円滑な接続の在り方についての研究を進める必要がある。

そこで、本研究で期待する成果と、成果に至るための手立てを以下のように考える。

A 言語や文化についての体験的な理解と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を重視し、英語を通して進んで理解し自信をもって表現できるようにするために、小学校低学年で養うコミュニケーション能力の素地の上に、中学年から教科としての学習を導入し、教育内容と方法を工夫する。また、国際社会にお

いて主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力の基礎を育成するために、「読むこと」「書くこと」を含めた4技能を総合的に育成するための指導を行う。

B 生徒の英語学習への動機づけや目的意識の高まり、コミュニケーション能力の向上のために、中学校外国語科の授業の中に、小学校で培った英語によるコミュニケーション能力の基礎が中学校でも引き継がれるようにするための指導を意識的に行う「スパイラルタイム」を位置付ける。指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指した指導を行い、教師間交流、児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図る。

C 国際社会において主体的に活躍するために求められる、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度を育むために、「学びのイノベーション」としてICTを積極的に活用し、遠方に住む児童生徒や異文化をもつ児童生徒との協働学習を行う。また、学習成果として制作する英語絵カード「ピクトフォリオ(※)」とそれらを蓄積・共有するための専用Webサイト「スノーマン・プロジェクト」の活用は、子供の文字への関心を引き出すとともに、「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲につながり、他者との協働学習による学びの広がりを実感させ、英語学習の動機づけと異文化理解を促す契機となり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながる。

※ 「ピクチャー」と「ポートフォリオ」から作り出した本研究開発における造語

## 2 教育課程の特例

- ・ 小学校第1学年及び第2学年：「英語活動」 年間17時間設定する。  
各教科から時数をあてる。
- ・ 小学校第3学年から第6学年：「小学校英語科」 年間35時間設定する。  
第3学年及び第4学年は各教科、総合的な学習の時間から時数をあてる。  
第5学年及び第6学年は外国語活動の時間の時数をあてる。  
※ ただし研究開発実施の効果の比較・検証のため、旭川小学校においては、第5・6学年の時数を各年間70時間設定する。

## IV 研究内容

### 1 教育課程の内容

#### (1) 小学校における英語教育のカリキュラム ～「英語活動」「小学校英語科」

小学校低学年でコミュニケーション能力の素地を養う。その上で、中学年から教科としての学習を導入し、教育内容と方法を工夫する。また、「読むこと」「書くこと」を含めた4技能を総合的に育成し、コミュニケーション能力の基礎を養うための指導を行う。

##### <英語活動の目標>

###### 【第1学年及び第2学年】

英語を通じて、言語や文化について体感的に理解し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

##### <小学校英語科の目標>

###### 【第3学年から第6学年】

英語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語の音声や基本的な表現を活用していく中で身に付けさせながら、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

カリキュラムの特徴は、およそ以下のようにになっている。

#### ① コミュニケーションを図る際の話題、場面・状況・相手の広がり

##### <話題>

自分の興味・関心から、徐々に自分にとって身近なもの・こと、地域から国に関することへ

(ア) 自分について (イ) 家族、他について (ウ) 自分の学校、町、日本について

(エ) 外国について

※ (ア)～(ウ)は、一部を低学年から扱い、主に中学年から高学年にかけて扱っている。(エ)は、ほぼ全学年で扱っている。

##### <場面・状況、相手>

(ア) 低学年：身近なもの・ことを表す英語を使い、先生や友達と主に遊び・ゲームを通した伝え合いを経験する。

なお、身近なもの・ことを表す英語とは、次に示すような範囲の英語を指す。

色、数、動物、野菜、食べ物、乗り物、形などの身近なもの・の名前、あいさつや動作を表す英語など。

(イ) 中学年：簡単な英語やアルファベットを使い、先生や友達との様々な場面・状況におけるコミュニケーションを経験する。(様々な場面での伝え合い、クイズ的要素、言い換えの経験・練習の要素)  
 なお、簡単な英語とは、次に示すような範囲の英語を指す。

身近なもの・ことを表す英語に加え、自分の気持ちや考えを伝え合うための英語など。

(ウ) 高学年：初歩的な英語を使い、先生や友達に加え、他校の児童生徒や大学生・大人とのコミュニケーションを経験する。(主に地域や国等の興味ある事実に関する伝え合い、意図する内容を既習の英語で言い換え)  
 なお、初歩的な英語とは、次に示すような範囲の英語を指す。

簡単な英語に加え、地域や国等の興味ある事実や意図を伝え合ったり、相手との関係を円滑にしたり、相手の行動を促したりするための英語など。

<言語の機能>

様々な場面・状況での、あるいは相手とのコミュニケーションを支えるために、事実情報を伝える、意見・判断を伝える、要求・提案を伝える、社交的活動を促す、談話をつくる、コミュニケーションを修復するといった言語の機能を、中学年以降で取り上げるようにしている。

② 使用語彙

6年間で繰り返し活用する総語彙数は837語、フレーズ数は49となっている。語彙は各学年・各単元に散りばめてある。ただし発達段階に合わせて出合わせ、その後は繰り返し活用させることも大切にしており、概ね以下のように位置付けている。

- ・ 主に低学年で出合わせる：色、形、乗り物
- ・ 低学年から中学年にかけて出合わせる：動物、家族、助動詞 can
- ・ 主に中学年で出合わせる：文房具、スポーツ、教科、体調、状態動詞のごく一部
- ・ 中学年から高学年にかけて出合わせる：自然、服装、学校、職業、性質・状態、味、場所
- ・ 主に高学年で出合わせる：時間、国、過去形・過去分詞のごく一部
- ・ 全学年にわたり扱うもの：数、虫・魚、食べ物、体、月、曜日、be 動詞、動作動詞の一部

③ コミュニケーションを図るための方略(応答表現と表現の言い換え)

(ア) 応答表現：主に中学年から高学年にかけて扱っている。

(イ) 表現の言い換え：全学年にわたり扱っているが、  
 学習方法については発達段階に合わせている。

※ 低学年：指さしやジェスチャーの重視  
 中学年：連想語の活用 高学年：文による表現

④ 「小学校卒業時の CAN-DO リスト」と「単元毎の到達目標」

聞くこと、話すこと(発表・やり取り)、読むこと、書くことに関する小学校における最終到達目標として、「小学校卒業時の CAN-DO リスト」を作成した。さらに最終到達目標に至る道筋となるよう、「小学校英語科」

(3～6年生)の各単元の目標に基づいて、「単元毎の到達目標」も作成した。発達段階に応じて聞くこと、話すこと(発表・やり取り)、読むこと、書くことの技能を定着させることができるよう、単元毎にどのような場面・状況で、英語を活用しながら何ができていればよいのか技能別に具体的に設定した。

⑤ 主な指導方法

各単元において、主に次の(ア)～(カ)にあるような学習活動を設定している。

(ア) ウォームアップの設定

毎時間3分程度の専用の動画教材を使用し、それを視聴し英語を声に出させながら、意味内容と音声と文字との関連、つながりを意識させている。したがって、動画における英語の提示は原則として、「場面(意味内容)→場面+音声→場面+音声+文字」の順としている。動画の前半はフォニックスの要素も含んでおり、おもしろくて意味のある文脈を提示している。(Hey, cook. Look at the book! 等) また後半は動画に合わせて既習の英語の音声と文字を提示し、繰り返し使う機会としている。

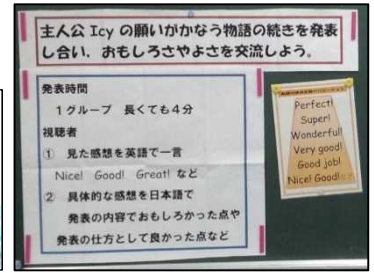
No.	CAN-DO	取り扱う場面・場面・具体的内容
1	インタビュー、スキット、クイズや各種ゲーム等をする中で、絵・写真、且具体物を見ながら身近なもの・ことを表す表現や簡単な英語を聞いて、意味や内容を理解することができる。	挨拶、他人の自己紹介、物の名前、数、色、天気、曜日など
2	インタビュー、スキット、発表等をする中で、絵・写真・具体物を見ながら初歩的な英語を聞いて、話し手の意図の大体を理解することができる。	
3	絵とともに簡単な英語で書かれた物語(絵本)の読み聞かせを聞き、ストーリーの流れや登場人物の特徴の大体を理解することができる。	
4	どのように答えたり質問を繰り返したりしたらいふかを考えながら、話し手の質問や発表を聞くことができる。	簡単なやり取りを認識して
5	インタビューやクイズや各種ゲーム等をする中、身近なもの・ことに関して質問したり答えたりするなど、簡単なやり取りをすることができる。	色、形、動物、乗り物、魚、動物、貝、虫、文房具、職業など
6	インタビューやクイズや各種ゲーム等をする中、場面や状況に合わせて自分が伝えたいことを話したり質問したりするなど、簡単なやり取りをすることができる。	友達を呼びよせたり、フォニックス・音で読む、電報、海外の生活時間、誕生日を祝うなど
7	簡単な挨拶をしたり、自分や自分の身の回り、地域にある事象について発表したりすることができる。	挨拶

学年・単元	聞くこと	話すこと(やり取り)	話すこと(発表)	読むこと	書くこと
3L1	英語でどのように書かばよいのか先生に質問したことに聞いて、教えてくれる語句を聞き、聞いたままに真似して言うことができる。	自分が知りたい語句に聞いて、英語でどのように書かばよいのか先生に質問することができる。	授業が行われる時間帯に合った英語の表現を聞き、簡単なやり取りをすることができる。	アルファベット大文字や小文字のカードをアルファベット外側に並べたり、かみ紙などから切り出したアルファベットカードを取ったりできる。	アルファベットの読み方と書かれたカードに書かれているアルファベット大文字・小文字を見ながら、形や発音・音に気をつけて名前を書いたり、書き写したりできる。
3L2	友達や先生が英語によるごく簡単な自己紹介を聞き、その意味を理解することができる。	自分が知っている語句に聞いて、英語でどのように書かばよいのか先生に質問することができる。	授業が行われる時間帯に合った英語の表現を聞き、簡単なやり取りをすることができる。	自分や友達の名刺に書かれている姓と名の読み方とアルファベット大文字・小文字のアルファベット大文字や、発音のアルファベット大文字を声に出して読むことができる。	自分の名前を書くために、見るとそれぞれが異なるアルファベット大文字で書かれ、横はすべて小文字で書かれている自分の名前(姓・名)を自分の名前をアルファベットで書く練習をしながら、アルファベットフォニックスの形や大きさを気に書き付けたり書き写したり、書き写したりできる。
3L3	友達や先生とそのときの気持ちを表す語句・表現を聞いて、その意味を理解し、自分に合うものを表すカードを選び、友達や先生にそのときの気持ちを伝えたり、簡単な英語で発表したりできる。	自分が知っている語句に聞いて、英語でどのように書かばよいのか先生に質問することができる。	授業が行われる時間帯に合った英語の表現を聞き、簡単なやり取りをすることができる。	自分や友達の名刺に書かれている姓と名の読み方とアルファベット大文字・小文字のアルファベット大文字や、発音のアルファベット大文字を声に出して読むことができる。	自分の名前を書くために、見るとそれぞれが異なるアルファベット大文字で書かれ、横はすべて小文字で書かれている自分の名前(姓・名)を自分の名前をアルファベットで書く練習をしながら、アルファベットフォニックスの形や大きさを気に書き付けたり書き写したり、書き写したりできる。



### (イ) コミュニケーションの目的・場面・状況等の提示

学習内容に興味・関心をもつことができるよう、単元におけるコミュニケーションの目的を明確にさせる。そのため単元で、もしくはその時間に取り上げるコミュニケーションの様子を収録した動画を視聴させ、場面や状況を捉えさせたり、場面の様子や理解できた英語から会話の内容を推測させたりする。



### (ウ) コミュニケーションを図るために必要な語句・表現を使うための準備の場

練習用の動画を視聴させながら、その時間に取り上げるコミュニケーションの場面に合った語句・表現を、聞いたり、教師の真似をしたりチャンツに合わせていたりしながら言ったり、読んだり、書き写したりさせる。動画を視聴させるかわりにJTEやALTが語句・表現を生々の声で提示することもある。

### (エ) ゲームや役割演技等を通して語句・表現を繰り返し使う場

各種カードゲーム、役割演技等を行いながら、英語を繰り返し聞いたり、話したり、読んだり、書き写したりさせる。単元の導入から中盤にかけて設定することが多い。この中でつまづきが見られたり困難さを感じていたりする児童に対し、丁寧な個別の指導・支援を行う。

### (オ) 目的達成のためのコミュニケーションを図る場

友達や教師、単元によってはICTを活用して遠方に住む児童生徒や、来校した大学生や留学生等と英語を使ってコミュニケーションを図りながら、目的達成に向けた活動をさせる。単元の終末に設定することが多い。

### (カ) 振り返りの場

コミュニケーションを図る中で楽しかった場面を想起させたり、わかったこと等を交流させたりする。また「単元毎の到達目標」に沿った内容の振り返りカードを使って、個別に学習の振り返りをさせつつ、教師の見取りに基づく具体的な価値付けの言葉をかけていく。これらを通して達成感を味わわせたり次時への課題意識をもたせたり、学習経験を生かせそうな場面を考えさせたりする。



## ⑥ 主な評価方法

(ア) ⑤の(ア)～(カ)の各場面における行動観察(単元の目標と「単元毎の到達目標」を参照しながら)

(イ) 振り返りの場における交流や振り返りカードを通じた見取り

(ウ) ピクトフォリオ等の成果物を通じた見取り(特に書くことの成果を見取る場合)

## (2) 中学校外国語科におけるスパイラルタイム

この「スパイラルタイム」は、小学校英語科のカリキュラムに基づき、学習内容の継続性を考慮し、小学校における体験的な活動から徐々に移行する橋渡しの時間であるとともに、討論やディベートなど、内容を重視したより高度な言語活動を含んだ高等学校の学習内容へと接続するための時間でもある。語学学習においてスパイラルな学びの場を提供することは当たり前のことではあるが、本研究では、教師の中で意識化を図るために意図的に実践している内容を「スパイラルタイム」と称している。

### ① スパイラルタイムの内容と目指す成果

#### (ア) 小学校での学びや既習事項を繰り返し活用させる指導計画の工夫

中学校1年生の入学直後の数時間において、小学校の「英語活動」「小学校英語科」を通して身に付けてきた語彙や表現を意図的に想起させながら言語活動に取り組みさせることにより、その習得状況を把握するとともに、その後の指導に生かしていく。

#### (イ) 英語で話したりやりとりしたりする力を高める帯的な活動の工夫

授業の中で日常的に音声を中心としたやりとりを重視した活動を行うことを通して、その場で考えて会話を継続したり、少し考えてから筋道を立てて論理的に話したりする力をはぐくむ。そして生徒が「英語を使ってできる」ことが増えていく実感を持たせられるようにする。

#### (ウ) 高校との接続を踏まえた場面設定の工夫

上記の(ア)や(イ)で行ってきた取組が実際に生かされる場面を設定することで、相手意識を高めるとともに4技能を総合的に育成することを目指す。具体的には、文化や年齢が異なる相手など、実際に交流する相手のいる場面を設定し、やりとりを重ねることにより、討論やディベートなどにつながるよう内容を重視したより高度な言語活動を目指し、高等学校への円滑な接続を図る。



## ② 主な指導方法

### (ア) 「小学校卒業時の CAN-DO リスト」や「小学校英語科」のカリキュラムの活用

「小学校卒業時の CAN-DO リスト」に沿って、それぞれの項目における実際のパフォーマンスや自信の度合いなどについて診断的に評価する。とりわけ、一般の公立小学校の「外国語活動」で学んできた生徒と「小学校英語科」で学んできた内部進学者との間に習得の状況に差が生じることが考えられることから、CAN-DO リストの項目の中で特に習得の状況が低いものを指導の重点としながら、できるだけ早い段階で定着させる方策を検討し、指導を継続していく。例えば、小学校で学んだ表現をカリキュラム表から抽出し、何度も繰り返し活用する場面を作りながら習得を促したり、小学校の授業で行う「3ヒントクイズ」と同じような活動を取り入れ、少しレベルを上げて実施したりするなどしている。

### (イ) 目標達成のための継続的な各種トレーニング

中学校の各学年の CAN-DO リストの能力記述文（ディスクリプタ）を意識しながら単元を構想し、各単元の目標や目指す姿を明示することで、生徒が見通しをもって取り組めるように指導している。

生徒が単元のゴールに向かう中で、言い換えたり聞き返したりしながらコミュニケーションを継続していくストラテジーを身に付けさせたり、これまでの学びを総動員して自分の気持ちや考えを何とか伝えようとしたりする場面を設定する。その際、日常的な会話はもとより、教科書の内容についての背景知識を活性化したり、単元末における発展的な活動につなげられたりするような話題を扱う。例えば、下のような指導を行っている。

学習の成果を発揮する機会として、タスクのゴールにおける活動を設定したり、パフォーマンステストを適切に位置付けたりするなどしている。さらに生徒が学習を振り返る場面を設けることに加えて、教師によるフィードバックも行い、生徒が英語を使って「できる」という感覚が高まるようにしている。

- ・ 流暢性を伸ばすために、発語数を増やすトレーニングを継続的に行う。
- ・ 小学校の指導内容から関連するものを取り上げ、授業の冒頭で帯的に扱う。
- ・ 相手に「Do you ~?」で尋ねて得た情報について、「Does he/she ~?」などを用いて問答する。
- ・ 教科書の内容をまとめて話したり、リテリングしたりする活動を行う。
- ・ 一人称のモノローグを即興で He/She likes と変換して言わせる。
- ・ 会話を継続するために、会話のターン数を記録しながら練習する。
- ・ 発問を少しずつ変化させてそれに答える活動を取り入れている。生徒たちは思考しながら自分の意見や根拠を簡単な英語で述べている。
- ・ 絵を見てその状況を説明したり、簡単な日本語のメモを見ながらその場で英文にして伝えたりする活動を行う。

### (ウ) 技能統合型の言語活動

コミュニケーションを図る目的・場面・状況等に応じて、英語を聞いたり読んだりして情報や考えなどを形成・整理・再構築し、それらを活用して英語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合うことができるようにする。

その際、高等学校との接続を踏まえ、実際に複数の高等学校の授業の様子を伺って指導に生かした。あるトピックについて、話すことから始めることで、単元の終わりにはコミュニケーションの目的・場面・状況等に応じて聞いたり読んだりしたことを活用して話したり書いたりする統合的な言語活動を行えるようにするなど、発表、議論、交渉につながるような実践を行った。

また、ある単元では、札幌市に滞在する外国人旅行者の中で「情報提供」の点で低い評価が出ているということに着目し、英語でパンフレットを作成するという課題を設定した。ALT が来日したときに困ったことや知りたかったことを質問してパンフレットに何を載せたらよいかを考え、プレゼンをする中で決定していくといったタスクを構成した。

## ③ 主な評価方法

(ア) 単元の目標が達成できたかを確認したり、CAN-DO リストに沿って「自信の度合い」を振り返らせたりする。

(イ) パフォーマンステストによる見取りを行う。(特にやりとりの成果に着目して)

### (3) ICT の活用

#### ① 学習成果の蓄積・共有や活用のために

学習の成果物としての英語絵カード「ピクトフォリオ」を制作し、それらを蓄積・共有し後の学習で活用していくことができるようにする専用 Web サイト「スノーマン・プロジェクト」(成果が蓄積され発展していく性格にちなんで命名)を設けている。「ピクトフォリオ」や「スノーマン・プロジェクト」は中学年から高学年、中学校にかけて制作・活用の機会を設けている。

例えば、小学校6年生の単元「物語の続きを書こう」においては、単元の中に新しい登場人物を創り出し、その絵を見せながら紹介する場面を設けている。その際、過年度に創り出された新しい登場人物の絵を参考にしたり、遠方の友達と創り出した新しい登場人物を見せ合いながら発想の多様さを味わったりできるよう、児童が制作した登場人物の「ピクトフォリオ」をアップロードし、「スノーマン・プロジェクト」で共有した。



## ② 遠方の児童生徒との交流・協働学習を実現するために

遠方に住んでいたり異文化をもっていたりする児童生徒とコミュニケーションを図る中で、自分たちとの共通点や相違点を認め合いながら協働的に学ぶ機会を設けている。

例えば5年生の単元「自分の町を紹介しながら附属小の人と交流しよう」では、iPad用アプリFaceTimeを通して、函館小学校の児童と釧路小学校の児童がそれぞれ自分たちの町を紹介しながら英語で交流することができた。タブレット端末をグループに配付して交流することができるので、各グループの交流時間を十分に確保することができ、それにより学習の成果も充実させることができた。ICTを活用することにより、普段は直接会うことができない遠方の友達とも比較的容易に対話を行うことができるようになり、同じ北海道の中にある自分たちとは異なる文化に触れる機会を得ることができた。



## 2 研究の経過

年次	研究推進・実施した内容
＜第一年次＞	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回）</li> <li>(2) 新教科「小学校英語科」の教育課程上の位置付けの検討</li> <li>(3) <b>新教科「小学校英語科」の目標設定とカリキュラム作成</b></li> <li>(4) 新教科「小学校英語科」評価の在り方の検討と CAN-DO リストの作成</li> <li>(5) <b>新教科「小学校英語科」を導入後の中学校英語の目標と指導計画の見直し</b></li> <li>(6) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施</li> <li>(7) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流・教師間交流の開始</li> <li>(8) 「スノーマン・プロジェクト」プレ運用開始</li> <li>(9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」実施</li> <li>(10) <b>「スパイラルタイム」のカリキュラム開発</b></li> <li>(11) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施</li> <li>(12) 評価委員会による評価の実施と次年度の方向性の検討</li> <li>(13) 中学校・高等学校間の効果的な連携の在り方について検討</li> </ol>
＜第二年次＞	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回）</li> <li>(2) <b>小学校第1学年からの「小学校英語科」の実施</b></li> <li>(3) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動</li> <li>(4) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回）</li> <li>(5) 1年次研究成果の評価／中学校英語の目標再設定</li> <li>(6) 「スノーマン・プロジェクト」の本格運用</li> <li>(7) 「どきどき！英語変換チャレンジ」の継続</li> <li>(8) <b>「スパイラルタイム」の実践</b></li> <li>(9) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施</li> <li>(10) <b>児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック</b></li> <li>(11) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討</li> </ol>
＜第三年次＞	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回）</li> <li>(2) <b>CAN-DO リストによる評価の一部実施と見直し</b></li> <li>(3) <b>小学生が習得する基礎的文法事項の習得状況調査と効果の測定</b></li> <li>(4) 中間評価（成果の確認と修正）</li> <li>(5) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動</li> <li>(6) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回）</li> <li>(7) <b>接続を意識した小学校と中学校のカリキュラムの見直し</b></li> <li>(8) 「スノーマン・プロジェクト」継続・活用</li> <li>(9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」継続</li> <li>(10) <b>「スパイラルタイム」の実践継続</b></li> <li>(11) <b>児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック</b></li> <li>(12) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討</li> </ol>
＜第四年次＞	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回）</li> <li>(2) <b>CAN-DO リストによる評価の実施と改善</b></li> <li>(3) <b>「スパイラルタイム」の実践のまとめ</b></li> <li>(4) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動</li> <li>(5) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回）</li> <li>(6) <b>カリキュラムと指導内容、方法の改善とまとめ</b></li> <li>(7) 「スノーマン・プロジェクト」継続・活用</li> <li>(8) <b>小・中学校で習得する基礎的なコミュニケーション能力の習得状況調査と効果の測定</b></li> <li>(9) <b>児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック</b></li> </ol>

	(10) 研究の成果と効果の検証
--	------------------

### 3 評価に関する取組

年次	実施した内容
<第一年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月, 2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検を用いた英語の理解力診断 (2月 小学校6年生) (3) 学力テストを用いた英語力の診断 (8月 中学校1年生) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り (6月～) (5) 上記 (1)～(4) の評価を基にしたカリキュラムの検証
<第二年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月, 2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検を用いた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生) (3) パフォーマンステストを用いた英語力の診断 (3月 中学校1・2年生) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り (6月～) (5) 上記 (1)～(4) の評価を基にしたカリキュラムの検証
<第三年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月, 2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 英検 Jr.等を用いた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生) (3) パフォーマンステストを用いた英語力の診断 (8月 中学校) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り (6月～) (5) 上記 (1)～(4) の評価を基にしたカリキュラムの検証
<第四年次>	(1) 児童生徒の情意面の実態調査 (4月 小学校5・6年生及び中学1・2年生) (2) 英検 Jr.等を用いた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生, 中学1年生) (3) パフォーマンステストを用いた英語力の診断 (8月 中学校) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り (4月～) (5) 上記 (1)～(4) の評価を基にした4年間の成果の検証 (11月)

## V 研究開発の成果

### 1 実施による効果

#### (1) 児童・生徒への効果

#### ① 「小学校英語科」の指導を通して、児童の英語力を向上させることができた。

平成26年度から28年度にかけて、小学校5・6年生4月と中学校1年生4月に英検 Jr. GOLD を実施して、英語力の客観的な調査を続けてきた。児童生徒の平均点の経年変化を見て、その伸びを確認することができた。

	平成26年度4月	平成27年度4月	平成28年度4月
平成28年度小5 275名			小5時の平均点 合計 <u>32.65</u>
平成28年度小6 236名		小5時の平均点 合計 <u>30.93</u>	小6時の平均点 合計 <u>35.27</u>
平成28年度中1 (内部進学者のみ) 211名	小5時の平均点 合計 <u>28.69</u>	小6時の平均点 合計 <u>32.82</u>	中1時の平均点 合計 <u>36.93</u>

※ それぞれの集団の平均点は、語句14 文章17 文字10 会話9点満点に対するものであり、合計50点満点である。

小学校別に見ていくと、旭川小学校の児童や旭川小学校出身の生徒のスコアの伸びは、4小学校の中でいちばん大きい。これは旭川小学校の5・6年生の「小学校英語科」の時間を年間70時間設定していることが要因となっていると考えられる。

これらに関して多重比較 (Bonferroni 法) を行ったところ、次のような結果を得ることができた。

※ 本研究開発で得たデータの統計的な分析では、有意水準 (0.01 または 0.05) 等の他に効果量解釈 (小・中・大) も行っている。

平成28年度中1に関する経年変化を見ていくと、統計的に有意な差が見られ、小5よりも小6が、小6よりも中1の平均点が有意に高いことが示され、効果量も大であった。したがって小5から中1にかけて経年的に英語力が有意に高くなっていることになる。平成28年度小6に関しては、効果量は小～中程度であったものの、統計的に有意な差が見られ、小5よりも小6の方が有意に平均点が高いことが示された。平成28年度小5に関しては、平均点が高い集団となっているが、これは小2時に「英語活動」、小3～小5で「小学校英語科」の学習を行ってきており、学習の成果が順調に蓄積されているためだと考えている。

このように、「小学校英語科」の指導を通して、児童の英語力を向上させることができたといえる。なお、「書くこと」に関しては英検 Jr. GOLD のデータだけではテストの性格上測りづらかったが、児童の成果物を見ると、文字の大きさや形、語と語の間の空白に気を付けて書き写したり、一つ一つの単語の綴りにも注意を払ったりし

ようにしていることがうかがえた。

## ② 学習への不安の傾向を明らかにし、それを軽減しコミュニケーションへの自信を向上させることができた。

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力の基礎を養うためには、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成も欠かせない。それを支えるものは、英語を使ってコミュニケーションを図りたいという気持ちや、図れそうだという自信の類であると考えた。

そこで、児童生徒のコミュニケーションへの積極性や自信の経年変化を測定するために、平成26、27、28年度に「児童生徒の動機づけや不安（情意面）に関するアンケート」（小5・6年4月、中1年4月）を実施し、因子分析を行った。質問項目は萬谷他（2013）で使用した32項目を採用した。回答は萬谷他（2013）と同様に、具体的な心理傾向を尋ねる30項目について、1（全くそう思わない）・2（そう思わない）・3（そう思う）・4（非常にそう思う）の4段階の評価を用いた。分析する因子は、カテゴリカル因子分析により抽出された、「自律・内発志向」「統合志向（目標言語の社会に溶け込みたい、一員になりたい）」「関係性（英語の時間の雰囲気が良い、先生の教え方が合っている等）」「WTC（コミュニケーションを図ろうとする意志）」「外発志向」とした。

アンケートの分析結果から次のように考察した。

児童は、英語を使ってコミュニケーションを図りたいという気持ちを、学年が上がっても持ち続けている。しかし内容が高度になっていくことで、自分の学習と指導法とのミスマッチを感じるようになる。その結果として自律・内発志向の低下が生じている。

また小学生の英語力と英語学習に対する不安との関係を明らかにするために、Fukuhara (2015)の小学生の英語学習に対する不安に関する質問項目（34項目）を用いて、小学校5・6年生に質問紙調査（6件法・リカー ト法）と自由記述調査を行った。因子分析を行ったところ「理解に対する不安」「発話に対する不安」「書くことへの不安」の各因子が得られた。さらに英検Jr.の各分野の合計と、不安に関する3因子の因子得点を用いて相関分析（ピアソンの積率相関係数）を行った。その結果から次のように考察した。

（特に、英語で表される内容を理解できるよう支援し、書くことに関する丁寧な指導を行いながら）不安を軽減できるよう指導方法を改善し、見通しをもって学習を進められると、英語力、さらにはコミュニケーションへの自信の向上につながるであろう。

これらの考察を基に、これまでの各校での実践を通して得られた成果を適用することで、英語の学習に楽しさや達成感を見出しながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、英語の力を伸ばすことも可能であると判断し、指導方法の改善を行った。ウォームアップを除くと、単元における指導は、コミュニケーションの目的・場面・状況等を明確化し、目的達成のためのコミュニケーションを図る場とそのための練習の場を確保し、課題に沿った振り返りを行うことに整理できた。詳細はIV 1（1）⑤に示したとおりである。

## ③ 生徒の英語学習への意欲が高まり、基本的な語彙を活用して話す力は向上した。

平成28年度中3の英語力の経年変化を見ると、有意な伸びが見られ、英語力は確実に伸びているといえる。

情意面の各因子の経年変化を見たが、ほとんどの因子に関して変化はわずかなものであった。ただし「関係性（英語の時間の雰囲気が良い、先生の教え方が合っている等）」因子の経年変化に関しては効果量が大の部分が見られた。例えば平成28年度の春に中学校第2学年の生徒に行った情意面でのアンケートでは、中1から中2にかけて、「関係性」因子の数値が上昇している。これは、日頃からペアやグループでの活動を多く取り入れており、学び合う意識も高まっていることによるものと思われる。

話す力については、パフォーマンステストを各学年で行い、データを分析した。そうしたところ、生徒の発話量は1・2年生間では大きな差はなかったが、3年生は他学年よりも圧倒的に多かった。使用語彙の頻度別の割合、語彙の多様性は学年によってあまり大きな差は見られず語彙の豊かさの変化はあまりないものの、基本的な語彙を即興で使えるようになってきているという流暢性の伸長を示している。

## ④ 異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれた。

本研究開発では、小小交流、中中交流、小中交流を「小学校英語科」や中学校外国語科「スパイラルタイム」において実施している。例えば小学校5年生の単元「自分の町を紹介しながら他の附属小の人と交流しよう」では、iPadのアプリFaceTimeを介した交流学習を行っている。中学校では、例えば函館と釧路双方の観光スポットやグルメなどを紹介するコラージュ作品を作成し、読み合うというような交流の場面を設定した。また例えば小学校4年生の3つの単元「どこにありますか」「学校の中を案内しよう」「注文しよう」と、中学校の「スパイ



ラルタイム」における学習内容を組み合わせて、「小学生が必要な物が売られているお店を見つけて買い物ができるように、中学生が言い換えやジェスチャーを駆使しながら商品の販売や道案内を行う」という授業実践も行った。いずれの授業においても、「普段関われない友達や先輩とのコミュニケーションが楽しかった」、もしくは「もっと英語を学習してよりよくコミュニケーションを図れるようになりたい」といった児童生徒の振り返りの内容を見ることができた。

さらに小学校6年生の単元「海外の人を日本食でおもてなし」では、北海道教育大学に來ている留学生を小学校に招いて実際に身近な日本食を紹介する学習を展開した。外国人との実際のコミュニケーションの場面であることから児童が困難さを感じているところもあったが、自分の紹介内容が伝わったうれしさ等、困難を乗り越えた達成感が振り返りの記述に表れていた。

以上のような学習を展開したことで、英語学習への動機づけと異文化理解が促され、国際社会において主体的に活躍するために求められる、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれつつあると考えている。

## (2) 教師への効果

### ① 「英語活動」「小学校英語科」の授業づくり・授業改善に参画し、そのための視点をもつことができた。

平成28年度に、小学校教員を対象とした「研究開発事業（小学校英語）についての調査」（アンケート調査、6～8月、43名回答）を行った。その結果、大部分の教師が、本研究開発で行っている英語教育に「満足」または「とても満足」しており、英語が好きな児童の割合は6～8割以上であろうと回答している。英語に自信がある児童の割合については、41%の教員が6～8割と回答はしているものの、意見は分かれている。このデータから、児童のコミュニケーションへの自信とそれを支える英語力を高めることはやはり大切であるという共通認識をもつことができた。さらに7割近くの教員が児童の英語力が上がっている実感をもっており、英語学習に関して動機づけが高まっていると考えていることから、児童の英語学習への動機づけについては日頃から工夫した方がよいという示唆を得た。

これらのデータに基づく共通認識と、各小学校における電子媒体を含めた教材等の整備、指導計画の立案や教材準備をはじめとした支援体制の確立があって、プロジェクトメンバー以外の教員も、「英語活動」「小学校英語科」の授業づくり・授業改善に参画できるようになった。

### ② 教師の指導観や指導方法が研究開発実施前と比べて変化してきている。

平成27年度に「教師の指導観や指導方法は変わったと思うかどうか」についてアンケート調査を行ったが、この時点で教師の指導観や指導方法が研究開発実施前と比べて変化してきていることがわかってきた。

アンケートの回答内容は、概ね次のようなものであった。

- 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を重要視することや、子供が主体的に学びを展開できるようにする方針は、大きく変わることはないと考えている。
- 読むことや書くことに関する指導は新たに取り入れていく必要があると感じつつも、読むことや書くことを含めて、コミュニケーションを図る必要感を生み出すための工夫を考えることは大切だと考えている。
- 視点に沿った振り返りを行わせることで、少しずつ子供が自ら学習の成果や課題を見出ししていくことができると考えている。

研究開発実施以前は、教員によっては「もし外国語活動が外国語科になったら、読むことや書くことの指導に力を入れなければならないのではないか」「中学校外国語科でやっていることも小学校の学習内容に入ってくるのではないか」といった先入観や憶測が少なからずあった。しかし研究開発を実施したことで、教科として実施する場合でも、外国語活動で大切にしていた「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」「主体的な学びの展開」「コミュニケーションを図る必要感を生み出すための工夫」等を引き続き大切にしていこうとする意識に変わってきている。「読むこと」や「書くこと」の指導を行う場合も、その必要感を引き出したり、その目的を明確にさせたりする等、動機づけを大切にしながら丁寧な指導を心がけるようになった。

## (3) 保護者等への効果

### ① 研究開発で実施している内容に対して興味・関心をもっている。

平成28年7月に、札幌・函館・旭川・釧路小学校の保護者を対象に、「研究開発事業（小学校英語）についての調査」（Web上で回答するアンケート、有効回答数237世帯分）を実施した。

その結果からは、子供の英語の学習に対する関心の高さがうかがえる。授業の内容をより具体的に知りたがっ

ている保護者の声も多く、それは研究内容への興味・関心の表れであり、引き続き学年・学級通信等で授業の様子を伝えていくことが望ましいと考える。また保護者へのアンケートを通して多くの児童が英語を学習したいという思いをもっていることもわかった。

## ② 児童の動機づけにつながるより具体的な学習評価の通知を望んでいる。

保護者の関心は学習評価に関しても表れており、普段どのような学習を展開し、児童がどうなっているのかを具体的に知りたがっている声も多かった。このこともあり、「小学校英語科」における児童の学習評価の通知の在り方についても検討するため、平成 27 年度から函館小学校において数値等（◎○△）による評価の通知も試みた。平成 27 年 10 月と平成 28 年 3 月に 3～6 年生の児童と保護者を対象に「数値等による評価の通知」と「文章記述による評価の通知」それぞれへの賛成度に関するアンケート調査を行った。その回答から、学年が上がるほど文章記述による評価の通知を望むようになっていく傾向にあり、児童も保護者も学習の評価を具体的に知りたがっていることが明らかとなった。したがって、設定する評価規準も学年や発達段階、実際の学習内容に応じた具体的な内容であることが肝要であり、具体の形として例えば小学校においても CAN-DO リスト形式の学習到達目標を設定し、児童と保護者と共有することは望ましいことであると考えられる。

## 2 実施上の問題点と今後の課題

### (1) 実施内容に関する課題

#### ① 「英語活動」「小学校英語科」と中学校外国語科とのつながりやゴールの設定について

本研究開発においては、当初は小学校第 1 学年から新教科「小学校英語科」を実施することを考えていた。しかし小学校低学年で設定しようとしていた目標や内容が、教科としてなじまないものであったため、検討し直した経緯がある。したがって、小学校第 1 学年からゆるやかにコミュニケーション能力を育成していった場合の良さや手立てについては各種データを得ることができたが、小学校第 1 学年から教科としての外国語教育を実施する場合の目標設定の在り方については、本研究開発では明らかにすることができなかった。

#### ② 小学校に「小学校英語科」の専科教員等の配置を望む声について

本研究開発では、一部で「小学校英語科」を指導する専科教員を配置したが、配置しなかったところでも専科教員の配置を望む声が教員の中からあった。主な理由としては、授業をデザインする際に、英語に関する専門的な知識や技能を身に付けている者がいる方がよりよい授業をつくれるからであった。

#### ③ 小学校における CAN-DO リストの内容と育成すべき資質・能力との関連について

「小学校卒業時の CAN-DO リスト」と「小学校英語科」の「単元毎の到達目標」を作成したが、育成すべき資質・能力と関連付けるところまでは進められなかった。

#### ④ 中学校外国語科のカリキュラムにおける研究開発学校としての特色について

本研究開発では、中学校における教育課程上の特例はなく、「小学校英語科」のカリキュラムとの接続や指導内容の「目玉」となる部分についてかなり議論をしてきたところである。とりわけ、標準時数の中で行う「スパイラルタイム」では、3つの活動を定義して従前の授業にその活動を溶け込ませていくという形で進めたが、研究開発学校としての特色をもっと出すべきだとの指摘もあった。今後、中学校でどのレベルの英語力まで高めていく必要があるのか、例えば CEFR-J では現在 A1 の下位レベルと考えると、それをいかに A1-2、A2-1 に持っていくのかを詳細に検討できるところまで至らなかった。

#### ⑤ 今後の一般化や普及に向けて

4年間の研究開発の成果や課題を生かし、それらを一般に普及するための視点を以下のように整理した。

- ・ 「英語活動」「小学校英語科」と「スパイラルタイム」のような小中連携の在り方
- ・ ICT を活用した他校との交流のノウハウ（特に遠隔地同士で交流を行う場合の工夫として）
- ・ 各種調査結果・データを根拠とした授業づくり（児童生徒の実態に応じるために）

### (2) 運営に関する問題

#### 諸会議の実施に関して

各小学校・中学校が互いに離れた場所にあるため、諸会議の運営や各種打合せに関しては工夫が必要であった。これは研究開発実施開始当初からわかっていたことであるため、期日を設定して直接集まったり E メールで連絡を取り合ったりする他に、大学で導入しているテレビ会議システムや、教員専用のネットワーク上の掲示板等を活用した。さらにファイルやデータは、クラウドサーバーを介して共有し、いつでもアクセスしたり更新したりできるようにした。しかしやはり定期的に直接集まって会議をもつ方がよいと感じる場面も多々あった。広域で研究開発を行う場合、どうしても乗り越えなければならない点だと改めて感じた。

## 北海道教育大学附属札幌小学校（外 3小学校） 教育課程表（平成28年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合学習的な時間	特別活動	小学校英語科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	300 (-6)		133 (-3)		100 (-2)	66 (-2)	66 (-2)		100 (-2)	34			34	17 (+17)	850 (0)
第2学年	309 (-6)		172 (-3)		103 (-2)	68 (-2)	68 (-2)		103 (-2)	35			35	17 (+17)	910 (0)
第3学年	235 (-10)	67 (-3)	172 (-3)	87 (-3)		56 (-4)	56 (-4)		102 (-3)	35		65 (-5)	35	35 (+35)	945 (0)
第4学年	235 (-10)	87 (-3)	172 (-3)	102 (-3)		56 (-4)	56 (-4)		102 (-3)	35		65 (-5)	35	35 (+35)	980 (0)
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	0 (-35)	70	35	35 (+35)	980 (0)
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	0 (-35)	70	35	35 (+35)	980 (0)
計	1429 (-32)	359 (-6)	999 (-12)	399 (-6)	203 (-4)	346 (-12)	346 (-12)	115	587 (-10)	209	0 (-70)	270 (-10)	209	174 (+174)	5645 (0)

※ 授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

- ・ 新教科（英語）では、他教科で扱う内容についてその一部を扱うこととし、減時数分の内容を担うこととする。  
例えば、国語で担っている話すこと・聞くことのうちのコミュニケーションの基礎、算数における数の基本や図形、時間、音楽における歌唱やリズム遊び、図画工作における造形活動、体育における身体表現、生活科における遊びや学校で働く人たち、理科における動植物の名前、社会科における地域の地名やお店の仕事などの内容である。

## 北海道教育大学附属札幌中学校（外 3中学校） 教育課程表（平成28年度）

	各教科の授業時数									道徳	総合的学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	外国語				
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35	1015
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	70	35	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	190	105	3045

※ 授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付けたりゴシック体で示すなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

- ・ 各学年において、外国語の時間の一部を小学校との継続的な指導の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定する。



## 学校等の概要1

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクサツポロシヨウガッコウ  
北海道教育大学附属札幌小学校

校長 戸田 まり

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番10号

電話 011-778-0471

FAX 011-778-0475

## 3 児童数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
69	2	72	2	69	2	71	2	69	2	74	2	421	12
0		4	1	4		2	1	4		2	1	16	3

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	18	0	1	0	1	11
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	39						

## 学校等の概要2

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクアサヒカワシヨウガッコウ  
北海道教育大学附属旭川小学校

校長 伊藤 一男

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道旭川市春光4条1丁目1番1号

電話 0166-52-2361

FAX 0166-52-2363

## 3 児童数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	71	2	75	2	70	2	72	2	74	2	433	12

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	1	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	31						

## 学校等の概要 3

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾククシロシヨウガッコウ  
北海道教育大学附属釧路小学校

校長 阿部 美穂子

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道釧路市桜ヶ岡7丁目12番48号

電話 0154-91-6322

FAX 0154-91-6324

## 3 児童数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
52	2	57	2	59	2	63	2	70	2	63	2	367	12

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	1	6
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	30						

## 学校等の概要 4

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクハコダテシヨウガッコウ  
北海道教育大学附属函館小学校

校長 新開谷 央

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道函館市美原3丁目48番6号

電話 0138-46-2235

FAX 0138-47-7376

## 3 児童数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
68	2	70	2	69	2	65	2	67	2	69	2	408	12

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	3
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	26						

## 学校等の概要 5

## 1 学校名、校長名

ホッカイトウキョウイクダイガクフソクサツホロチュウガッコウ  
北海道教育大学附属札幌中学校 校長 佐々木 貴子

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番11号  
電話 011-778-0481 FAX 011-778-0483

## 3 生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
108	3	104	3	108	3	320	9
4	1	7	1	8	1	19	3

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	1	1	0	19	0	2	0	0	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
2	1	3	0	38						

## 学校等の概要 6

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフソクアサヒカワチュウガッコウ  
北海道教育大学附属旭川中学校 校長 安藤 秀俊

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道旭川市春光4条2丁目1番1号  
電話 0166-53-2751 FAX 0166-53-2861

## 3 生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
110	3	108	3	112	3	330	9

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	15	0	1	0	0	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	4	3	0	34						

## 学校等の概要 7

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフソククシロチュウガッコウ

北海道教育大学附属釧路中学校 校長 酒井 多加志

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道釧路市桜ヶ岡7丁目12番2号

電話 0154-91-6857

FAX 0154-91-6812

## 3 生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
104	3	96	3	95	3	295	9

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	4
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	27						

## 学校等の概要 8

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフソクハコダテチュウガッコウ

北海道教育大学附属函館中学校 校長 金光 秀雄

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道函館市美原3丁目48番6号

電話 0138-46-2233

FAX 0138-47-6769

## 3 生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
109	3	106	3	106	3	321	9

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	8
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	31						